一般演題（2B1-2）

遷延性意識障害患者の意識レベルの改善と摂食機能の改善との関連性について

森近　正和[1]、永友　孔香[1]、片岡　恵美子[1]、渡邊　伸顕[2]、本田　千穂[3]、衣笠　和孜[3]

[1]独立行政法人 自動車事故対策機構 岡山療護センター 看護部、
[2]独立行政法人 自動車事故対策機構 岡山療護センター 外科、
[3]独立行政法人 自動車事故対策機構 岡山療護センター 脳神経外科

【はじめに】当院は重度遷延性意識障害患者が入院しており、入院時より表情筋マッサージなど間接・嚥下訓練と身体全体の協調運動機能などのセルフケア能力を高められるようケアを行っている。経口摂取が可能となった患者では経口摂取が不可能であった患者に比べて経口摂取以外のNASVAスコアの項目も改善しているような印象がある。そこで、今回1食でも経口摂取が可能になった患者と経口摂取不可能な患者のNASVAスコアを項目ごとに比較検討した。
【方法】対象は2008年6月から2012年12月までに入院した患者37名。1食以上経口摂取可能になったA群（18名）とそうでないB群（19名）に分類。それぞれ摂食を除くNASVAスコア各項目（運動・排泄・認知・発声発語・口頭命令の理解）ごとに何名改善・維持（悪化）したか調べ統計学的に（X2検定P<0.05）分析した。
【結果】認知はA群：改善17名　維持・悪化1名、B群：改善11名　維持・悪化8名、発声・発語はA群：改善14名　維持・悪化4名、B群：改善7名　維持・悪化12名であった。検定の結果、認知および発声発語機能の改善度にはA群とB群で有意差を認めたが、その他の項目では有意差はなかった。
【考察・まとめ】1食でも経口摂取が可能になった患者では、NASVAスコアの認知、発声・発語の項目が改善していた。重度遷延性意識障害で経口摂取が不可能な患者であっても間接嚥下訓練や協調運動機能などの訓練を継続していくことが意識障害改善の可能性を高めていくのではないかと考える。